

一味の一考察

松 田 隼 人

曇鸞³ (T'an luàn, 476~542頃) は、中国山西省北部の五台山近くの雁門で生まれ、出家ののちは竜樹系の智度論・中観論・十二門論・百論の四論教義に親しんだ。のち、浄土の三部経といわれる無量寿経、観無量寿経、阿弥陀経を浄土衆生の聖典とし無量寿経論の注釈たる往生論註と阿弥陀仏への信仰というべき讃阿弥陀仏偈を著し、仏願力に乗ずる易行道を宣布し浄土教義を確立した。その教義は道綽・善導をへて日本に伝わり法然・親鸞、とくに親鸞の浄土教義の基礎となった。その曇鸞和尚の『和讃³』に「尽十方無礙光の大悲大願の海水に煩惱の衆流帰しぬれば智慧のうしほに一味なり」という御文がある。一体「一味」とはなんだろうか。一味とは一味で、合流とか、とけあうとかいわれているが、しかし、大切なところ故に、その一味の一端を一考察してみたいと思う。まず「尽十方無礙光の大悲大願の海水」ということばだがこれは一体なにを示されているのだろうか。ご承知のように『大無量寿経³』には次のような四十八願がたてられた。

「設我得仏。国有地獄。餓鬼畜生者。不取正覚。設我得仏。国中人天。寿終之後。復更三惡道者。不取正覚。設我得仏。国中人天。形色不同。有好醜者。不取正覚。設我得仏。国中人天。不識宿命。不至不如。百千億那由他。諸劫事者。不取正覚。設我得仏。国中人天。不得天眼。下至不具。百千億那由他。諸仏国者。不取正覚。設我得仏。国中人天。不得天耳。下至聞。百千億那由他。諸仏所説。不悉受持者。不取正覚。設我得仏。国中人天不得見他心智。下至不如。百千億那由他。諸仏國中。衆生心念者。不取正覚。設我得仏。国中人天。不得神足。於一念頃。下至不能。超過百千億那由他。諸仏国者。不取正覚。設我得仏。国中人天。若起想念。貪計身者。不取正覚。設我得仏。国中人天。不住定聚。必至滅度者。不取正覚。設我得仏。光明有能限量。下至不照。百千億那由他。諸仏国者。不取正覚。設我得仏。寿命有能限量。下至百千億那由他劫者。不取正覚。設我得仏。國中声聞。有能計量。下至三千大千世界。声聞緣覚。於百千劫。悉共計校。知其数者。不取正覚。設我得仏。国中人天。寿命無能限量。除其本願。脩短自在。若不爾者。不取正覚。設我得仏。国中人天。乃至聞有。

不善名者。不取正覺。設我得仏。十方世界。無量諸仏。不悉咨嗟。稱我名者。不取正覺。設我得仏。十方衆生。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法。設我得仏。十方衆生。發菩提心。修諸功德。至心發願。欲生我國。臨壽終時。假令不與。大衆圍繞。現其人前者。不取正覺。設我得仏。十方衆生。聞我名号。係念我國。植諸德本。至心廻向。欲生我國。不果遂者。不取正覺。設我得仏。國中人人。不悉成滿。三十二大人相者。不取正覺。設我得仏。他方仏土。諸菩薩衆。來生我國。究竟必至。一生補處。除其本願。自在所化。為衆生故。被弘誓鎧。積累德本。度脫一切。遊諸仏國。修菩薩行。供養十方。諸仏如來。開化恆沙。無量衆生。使立無上。正真之道。超出常倫。諸地之行。現前修習。普賢之德。若不爾者。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。承仏神力。供養諸仏。一食之頃。不能徧至。無數無量那由他。諸仏國者。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。在諸仏前。現其德本。諸所欲求。供養之具。若不如意者。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。不能演說。一切智者。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。不得金剛。那羅延身者。不取正覺。設我得仏。國中人人。一切万物。嚴淨光麗。形色殊特。窮微極妙。無能稱量。其諸衆生。乃至逮得天眼。有能明了。弁其名數者。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。乃至少功德者。不能知見。其道場樹。無量光色。高四百里。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。若受說經法。諷誦特說。而不得弁才智慧者。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。智慧弁才。若可限量者。不取正覺。設我得仏。国土清淨。皆悉照見。十方一切。無量無數。不可思議。諸仏世界。猶如明鏡。

觀其面像。若不爾者。不取正覺。設我得仏。自地已上。至千虛空。宮殿樓觀。池流華樹。國中所有。一切万物。皆以無量雜寶。百千種香。而共合成。嚴飾奇妙。超諸天人。其香普熏。十方世界。菩薩聞者。皆修仏行。若不如是者。不取正覺。設我得仏。十方無量。不可思議。諸仏世界。衆生之類。蒙我光明。触其身者。身心柔軟。超過天人。若不爾者。不取正覺。設我得仏。十方無量。不可思議。諸仏世界。衆生之類。聞我名字。不得菩薩。無生法忍。諸深總持者。不取正覺。設我得仏。十方無量。不可思議。諸仏世界。其有女人。聞我名字。歡喜信樂。發菩提心。厭惡女身。壽終之後。復為女像者。不取正覺。設我得仏。十方無量。不可思議。諸仏世界。諸菩薩衆。聞我名字。壽終之後。常修梵行。至成仏道。若不爾者。不取正覺。設我得仏。十方無量。不可思議。諸仏世界。諸天人。聞我名字。五体投地。稽首作礼。歡喜信樂。修菩薩行。諸天人。莫不致敬。若不爾者。不取正覺。設我得仏。國中人人。欲得衣服。隨念即至。如仏所讚。應法妙服。自然在身。若有裁縫。擣染浣濯者。不取正覺。設我得仏。國中人人。所受快樂。不如漏尽比丘者。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。隨意欲見。十方無量。嚴淨仏土。應時如願。於寶樹中。皆悉照見。猶如明鏡。觀其面像。若不爾者。不取正覺。設我得仏。他方国土。諸菩薩衆。聞我名字。至干得仏。諸根闕陋。不具足者。不取正覺。設我得仏。他方国土。諸菩薩衆。聞我名字。皆悉速得。清淨解脫三昧。一發意頃。供養無量。不可思議。諸仏世尊。而不失定意。若不爾者。不取正覺。設我得仏。他方国土。諸菩薩衆。聞我名字。壽終之後。生尊貴家。若不爾者。不取正覺。設我得仏。他方国土

。諸菩薩衆。聞我名字。歡喜踊躍。修菩薩行。具足德本。若不爾者。不取正覺。設我得仏。他方国土。諸菩薩衆。聞我名字。皆悉逮得。普等三昧。住是三昧至千成仏。常見無量。不可思議。一切諸仏。若不爾者。不取正覺。設我得仏。國中菩薩。隨其志願。所欲聞法。自然得聞。若不爾者。不取正覺。設我得仏。他方国土。諸菩薩衆。聞我名字。不即得至。不退轉者。不取正覺。設我得仏。他方国土。諸菩薩衆。聞我名字。不即得至。第一第二。第三法忍。於諸仏法。不能即得。不退轉者。不取正覺」

とある。これを四十八願という。ところが、この四十八願は「設我得仏。十方衆生。至生信樂。欲生我國。及至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法」設い我仏を得んた十方の衆生至心に信樂して我が國に生まれんと欲し及至十念せん若し生れずば正覺を取らじ唯五逆と正法を誹謗せんとをば除かんとあり、十八願の意に統攝される。法然は、この十八願を選択本願と名づけたが、この世界こそ、惡業流転の衆生を救済してくれる世界であり本願海である。曇鸞の「尽十方無礙光の大悲大願の海水」とは、まさにこの本願海をいうのであって、煩惱より他に、なにもない人間に行ずることのできるものは、ただ念仏であるということがわかるのである。時に曇鸞は、この世界を、尽十方無礙光の大悲大願の海水といわれているが、なぜ、尽十方無礙の大悲大願の海水といわれなかったのだろうか。

一体「光」は、いかなる意味を持つのであろうか。『觀無量壽經』⁽³⁾には

「無量壽仏。有八万四千随形好。一一好。復有八万四千光明。一一光明。徧照十方世界。念仏衆生。攝取不捨。其光明相好。及与化仏。不可具説。但當憶想。令心眼見。見此事者。即見十方。一切諸仏。以見諸仏故。名念仏三昧。作是觀者。名觀一切仏身。以觀仏身故。亦見仏心。仏心者。大慈悲是。以無緣慈。攝諸衆生」

とある。この御文の大意は光明について示されている。つまり、如来は八万四千の一一の相好より、八万四千の光明を放ち、その光明・十方世界を照して、衆生を攝取不捨するといふのである。しかし、この光明は「心眼をして見しむべし」とあるから肉眼では見えない。

心眼によって見ることができるといふのである。そして「此の事を見る者は即ち十方衆生の諸仏を見る」とある。諸仏とは即弥陀であり、弥陀は即諸仏で、弥陀を信ずるものは諸仏の護念證誠のなかにあることを見ることができるといふのである。してみると「心眼をして見しむべし」は、なにを見なのかといえ、護念證誠のなかにある我を見るのである。だから「諸仏を見るを以ての故に念仏三昧と名く」で、念仏三昧のなかにおいて諸仏を見ることができるのである。しかし「仏身を觀するを以ての故に亦仏心を見る仏心とは大慈は

れなり」仏身を觀するものは、仏心を見ることができ、仏心とは大慈悲であり大慈悲なるが故に仏心といわれるのである。

続いて「無縁の慈を以て諸の衆生を摂す」とあるが、無縁の慈とは大慈悲のことである。

だから、大慈悲を以て諸の衆生を摂取不捨するという仏心を説かれたものである。無縁の慈について今少し考えることにする。慈悲に三縁の区分がなされていることはご承知の通りである。衆生縁の慈悲・法縁の慈悲・無縁の慈悲、この三つである。衆生縁は小慈悲といわれ、法縁は中慈悲・無縁は大慈悲といわれている。衆生の苦を縁として起る慈悲が衆生縁の慈悲とするなら、衆生の法を縁しておこす慈悲が法縁の慈悲である。ところが、何等、縁することなくおこす慈悲が無縁の大慈悲である。若し、この三縁の慈悲を別のことばでいうと、衆生縁の慈悲は觀世音の慈悲であり、法縁の慈悲は勢至の慈悲であり、無縁の大慈悲は弥陀本仏の大慈悲ということが出来る。また、勢至と觀音は、弥陀本仏の智慧と慈悲の具現ということもできる。『本願寺聖人親鸞伝絵上』には

「大師聖人すなはち勢至の化身太子又觀音の垂迹なり是の故にわれ二菩薩の引導に順じて如来の本願を弘むるにあり真宗これによつて興じ念仏これによりて熾なり是れ併ら聖者の教誨によつてさらに愚昧の今案をかまへず彼の二大士の重願たゞ一仏名を専念

するにたれり今の行者錯つて脇士につかふることなかれ、たゞちに本仏をあふぐべしと云々」

とある。このなかに、二菩薩の引導に順じてとあるように觀音の慈悲とか、勢至の慈悲だけにとゞまるのでなく、弥陀の大慈悲の領解のなかに二菩薩を超えて本仏をあふぐべしとあるのだから、我々はこの二菩薩の引導によつて本願に帰せねばならない。この大悲の本願の意を明確に示されたのが「仏心とは大慈悲なり無縁の慈を以て諸の衆生を摂す」というのである。摂すとは、摂取不捨のことであるが『教行信証』には

「涅槃經に言はく善男子大慈大悲を名けて仏性と為す何を以ての故に大慈大悲は常に菩薩に隨ふこと影の形に隨ふが如し一切衆生畢に定んで当に大慈大悲を得べし是の故に説きて一切衆生悉有仏性と云へるなり大慈大悲は名けて仏性と為す仏性は名けて如来と為す大喜大捨を名けて仏性と為す」

とある。つまり、如来心である仏性を大慈大悲大喜大捨と示され拔苦与樂の本願がすでに動いていることを説かれるのである。本願とは第十八願の至心信樂の願である。この世界が無縁の大慈悲の世界であるが『御文章』には

「当流の安心の趣をくはしく知らんと思はん人はあながちに智慧才学もいらす男女貴賤もいらすたゞ我が身は罪深きあさましき者なりと思ひとりてかゝる機までも助けたまへる仏は阿弥陀如来

ばかりなりと知りて何のやうもなく一筋にこの阿弥陀ほとけの御袖にひしと縋りまゐらす思をなして後生を助けたまへたとのみ申せばこの阿弥陀如来は深く歎びまじくてその御身より八万四千の大きな光明を放ちてその光明の中にその人を摂め入れておきたふべしさればこの意を経にはまさに光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨とは説かれたりと心得べし」

とある。仏心の大喜大捨の大喜がこれである。それでは大捨とはなんだろうか。太陽は花を咲かせるが、その花を大地に捨て、決して所有はしない。仏の大慈悲も大地に咲いた念仏の華を所有はしない。捨てられたまゝ、が攝取不捨のなかに生きているのであり、これが第十八願の徳である。してみると、尽十方無礙の世界も、また尽十方無礙光の光の世界もともに弥陀の誓願不思議の世界を意味している。『教行信証』^③には

「然煩惱成就凡夫、生死罪濁羣萌、獲往相廻向心行即時入大乘正定聚之數。往正定聚故必至滅度。必至滅度即是常樂常樂即是畢竟寂滅、寂滅即是無上涅槃」

とある。この御文は、この弥陀の誓願不思議によつてたすけられる往生即成仏の世界を示されている。このことは親鸞の全てでもあるが、弥陀の誓願は衆生に業苦あるが故に救済を成就してくれるのである。勿論、この往生浄土の大因は念仏である。『歎異鈔』^④には

「弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて往生をば遂ぐるな

りと信じて念仏をさんとおもひたつこゝろの発る時すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり弥陀の本願には、老少善の人をえらばれず、たゞ信心を要とすと知るべしその故は罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にましますしかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらず念仏にまざるべき善なき故に、惡をもおそるべからず弥陀の本願をさまぐるほどの惡なき故にと云々」

とある。つまり、弥陀の誓願不思議を信ずることによつて信心海に帰入することができるのである。曇鸞の「尽十方無礙光の大悲大願の海水に煩惱の衆流帰しぬれば」とは正にこのことである。この海水は、弥陀の誓願不思議の大海であり、智慧と慈悲の本願の世界を意味する。「衆流帰しぬれば」の帰とは帰入である。他力本願の宗教の本質はここにある。『歎異鈔』^④には

「令仏者は無礙の一道なりそのいわれいかんとならば、信心の行者には天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなし罪惡も業報を感ずることあたはず諸善も及ぶことなき故なりと云々」

とある。いかに、この世の中が、五濁惡世の濁乱の世界であるとしても、信心への帰入は、あらゆる問題を解決する。

『教行信証』^⑤には

「次言信業者、則是如来満足大悲円融無礙信心海。是故疑蓋無有間雜、故名信業。即以利他廻向之至心、為信業体也」

とある。この、満足大悲円融無礙の信心海とは、尽十方無礙光の大悲大願の大海である。別名、本願力廻向の大信心海であり、大信心海なるが故に一切を生かすのである。また『教行信証』¹²には

「菩薩は是の如く五門の行を修して自利利他して速に阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得たまへるが故にといへり仏の得る所の法を名けて阿耨多羅三藐三菩提と爲す此の菩提を得るを以ての故に名けて仏と爲す今速得阿耨多羅三藐三菩提と言へるは是れ早く仏に作ることを得たまへるなり阿は無に名く耨多羅は上に名く三藐は正に名く三は偏に名く菩提は道に名く統ねて之を訳すれば名けて無上正徧道と爲す無上とは言ふこゝろは此の道理を窮め性を尽すこと更に過ぎたる者無し何を以てか之を言ふとならば正を以ての故に正とは聖智なり法相の如く知るが故に称して正智と爲す法性は相無きが故に聖智は無知なり偏に二種有り一には聖心徧く一切の法を知す二には法身徧く法界に満てり若は身若は心徧せざること無きなり道とは無礙道なり経に言はく十方の無礙一道より生死を出づと一道とは一無礙道なり無礙とは謂く生死即ち是れ涅槃なりと知るなり」

とある。これによると、一道とは一無礙道なりで、無礙は生死即涅槃という絶対知であるというのである。この絶対知の世界が大信心海である。『願生偈』¹³には「世尊我一心。帰命尽十方。無礙光如来。願生安樂国」とある。これは弥陀の名号のなかにある生死即涅槃、煩惱即菩提、即ち不二法門の徳

義海を帰命尽十方無礙光如来と讃えられたのである。よって帰入とは、こうした大信海への帰入であり大信心のことである。そして、この本願の大信海に衆生の煩惱の河が帰入する時、智慧のうしほに一味になるというのである。いいかえれば、衆生が煩惱を自覺して他力本願の世界に生きる時、智慧のうしほに一味になるというのである。この一味の一は、大變に大切なことばだと思う。『教行信証』¹⁴には

「一乗海と言ふは一乗は大乗なり大乗は仏乘なり一乗を得る者は阿耨多羅三藐三菩提を得るなり阿耨菩提とは即ち是れ涅槃界なり涅槃界は即ち是れ究竟法身なり究竟法身を得る者は則ち一乗を究竟するなり異なる法身無ず如来は即ち法身なり一乗を究竟する者は即ち是れ無辺不斷なり大乗は二乗三乗有ること無し二乗三乗は一乗に入らしめんとなり一乗は即ち第一義乘なり唯是れ普願一仏乘なり」

とある。この一仏乗が『教行信証』となつて衆生海に廻向顯現されるのである。「一乗は二乗三乗有すること無し」といわれるように、一味の一は、一切衆生を智慧のうしほに円融せしめんとする一で、つまり、満足大悲円融無礙の信心海の徳を示されたものである。これは、大無量寿経全体に流れる南無阿弥陀仏名号の尊さでもある。円融は、融かすことであるが、融かすとは煩惱をそのまま本願海の力によって功德に変えることでもある。尽十方無礙光の大悲大願は、そうい

う一を含み、力というか願力をもっている。前のべた『大無量寿経』の「設我得仏。十方衆生の至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。唯除五逆。誹謗正法」は、その心である。至心信樂の、この大海に一味たる衆生は、やがて正定聚から滅度にいたる。滅度とは涅槃界であるが、如来の智慧のうしほによって一味となり、煩惱即菩提と智徳を成就するのである。また、『教行信証』¹⁵には

「性と言ふは是れ必然の義不改の義なり海の性は一味にして衆流入る者必ず一味と為り海の味彼に隨いて改まらざるが如し又人身の性不浄なるが故に種々の妙好の色香美味身に入りぬれば皆不浄と為るが如し安樂浄土は諸の往生の者不浄の色無し不浄の心無し畢竟して皆清浄平等無為法身を得しむ安樂国土の清浄の性成就したまへるを以ての故なり正道大慈悲出世善根性とは平等の大道なり平等の道を名けて正道と為る所以は平等は是れ諸法の体相なり諸法平等なるを以ての故に発心等し発心等しきが故に道等し道等しきが故に大慈悲等し大慈悲は是れ仏道の正因なるが故に正道大慈悲と言へり」

とあるが、浄土はこの正道の大慈悲より生じ、この大慈悲の心が出世の善根であるという。正道の大慈悲とは「平等の大道なり」で、まず平等の大慈悲によって開顯された世界が、尽十方無礙光の世界である。

また文中「性と言ふは是れ必然の義、不改の義なり」とあ

り、不改であるから他にはなにもくらべるものがないというのである。つまり一切衆生の惡業煩惱を、この尽十方無礙光の徳に、あるいは「海の性は一味にして衆流に入る者必ず一味と為り海の味彼に隨ひて改まらざるが如し」とあるから、衆生はこの一味によって救済されていくのである。

- 1 曇鸞 大百科事典平凡社 一九八五年三月発行
『真宗聖典』明治書院発行 一九七七年八月発行
- 2 和讀 一一の二六頁
- 3 大無量寿経 一の一三頁
- 4 觀無量寿経 二の一五頁
- 5 本願寺聖人親鸞伝絵上 三二の二頁
- 6 教行信証 一二の七三頁
- 7 御文章 二九の二六頁
- 8 教行信証 一二の一八頁
- 9 歎異鈔 二三の一頁
- 10 歎異鈔 二三の三頁
- 11 教行信証 一二の七〇頁
- 12 教行信証 一二の四〇頁
- 13 願生偈 八の一頁
- 14 教行信証 一二の四三頁
- 15 教行信証 一二の一五〇頁

△キーワード▽ 一味、和讀、本願海

（作陽短期大学助教授）